

初期救急型拠点病院

川崎市南部に開設へ

現場滞在時間短縮目指す

川崎市は4日、重症患者の救急搬送における現場滞在時間を短くしていくため、必ず患者を受け入れる「初期救急型拠点病院」を市南部に1、2カ所、2012年度中に開設する方針を明らかにした。同市では、搬送先が見つからないため現場滞在時間が30分以上になる割合が、07年から3年連続ワースト（政令市と東京23区）。国の特例を活用し、県内初となる救急の最後の砦（とりで）を設け、汚名返上を目指していく。

市健康福祉局によると、救急告示医療機関が受け入れ不能の場合、心肺停止など生命の危険がある患者を除く重症患者を24時間365日受け入れ、初期の治療を実施する拠点病院を川崎南部医療圏（川崎、幸、中原区）に開設する。容体安定後、患者を後方医療機関に移し、新たな重症患者の受け入れに備える。

活用し、同医療圏の民間病院に再配置する。

同局によると、重症患者の救急搬送における現場滞在時間30分以上の割合は16・5%（09年）。この状況を解消していくことが喫緊の課題になっている。

同医療圏は、基準病床数（3998床）を大きく上回っているが、複数の公立病院の再編に伴い、地域特有の課題がある場合などは、医療法の特例でこうした未利用の病床を活用することが認められている。救急告示医療機関を対象に5月に公募し、12年度中の開設を目指す。

同日開かれた市議会予算審査特別委員会で、三宅隆介氏（無所属）の質問に、市側が答えた。（佐藤 英仁）